

特攻隊員がたどった心の軌跡

い で さ だ じ 井出定治物語



1926年、静岡県に巡査の息子として生まれる。海軍飛行予科練習生となり特攻隊パイロットとして出撃命令を待っていたときに終戦を迎えた。

終戦後の混乱期に、法政大学法学部第2部に入学。教会の一部に間借りをしていた関係で、言われるままに洗礼を受け、名前だけはクリスチャンになっていたが、1949年、英国人宣教師オードリー・ヘンティ(戦前から戦後にかけて50年余を日本で過ごした)に出会い、「大空がぐるりと一回転するような」新生を経験した。

ある集まりで、特攻隊員からキリストとの出会いを語った時、これからどのように生きるか、何をするかを話す段になり、気がついてみると「このキリストのために自分の生涯をささげたい、いやささげます」と繰り返し語っていた自分があった。伝道者への召しは実に自然にやって来た。その後、法政大学を中退し、関西聖書神学校に籍をおくものの、肺結核にかかり闘病生活を余儀なくされる。

すでに老齢となり、健康を損ねていたヘンティがイギリスに帰国することになり、お別れのことばを井出に求められるとこのように答えた。「主イエス・キリストさえ、ご自分を喜ばせることはなさいませんでした。あなたは自分を喜ばせる伝道者になってはいけません」。これは井出にとって、終生忘れられないことばとなった。

その後、東京神学塾、聖書神学舎を経て、蕨福音自由教会牧師、キリスト教朝顔教会主任牧師、協力牧師を歴任。その卓越した説教は、だれにもよくわかる身近な内容であるばかりか、「確かな聖書釈義と神学的骨格を持ち、聴き手に迫る明確なメッセージで構成された主題的な講解説教」(後任牧師、後藤敏夫氏)であったという。

若い日に結核を病み、輸血のために肝硬変になり、病は肝臓癌に進行したが、できるだけ長く講壇に立ちたいという願いから、身体が衰弱するような治療はせず、召される2週間前まで教会の講壇に立つ。「息を引きとられるとき、私は病室にいましたが、まるでこのように生き、このように死ぬのだよ、と身体をもって語りかけるように、前のめりに御国に旅立たれました。病室には翌週の主日礼拝の説教のために、ローマ書の注解書や参考書が置かれていました」(後藤氏による)。2001年6月15日、現職のまま召天。

今回は戦後日本を代表する牧師の一人、井出定治の生涯を、自伝『泉への細きわたち』をもとにご紹介します。

記

1. 日時:2017年7月14日(金) 10:30 AM より
2. 場所:ゴスペルホール(電話 026-295-6705)
3. 講師:尾崎富雄(ゴスペルホール代表)